日本SPF豚協会だより
Report of JAPAN SPF Swine Association 2009.10 第37号

提◆言

協会設立40周年に寄せて

日本ＳＰＦ豚協会ＳＰＦ豚農場認定委員会委員長　柏崎　守

ＳＰＦ養豚への期待が一段と高まる中、協会設立40年を迎えたことを心より嬉しく思います。協会は1969年に設立されましたが、40年経った今、協会の会員自らが生産現場の視点でＳＰＦ養豚システムの全体についてもう一度評価していただき、新たな展開に向けての決意を確認し合う機会にしてほしいと願う一人です。

協会の設立当時といえば、全国の養豚戸数は約45万戸、豚肉の輸入自由化を目前に控え国際競争力の強化が叫ばれ、政府の“多頭飼育”のかけ声のもと、規模拡大による生産性向上が官民一体となって推進された時代です。しかし、それとは裏腹に、衛生問題が一挙に顕在化して「豚病に濃厚汚染された日本列島」と揶揄されたのもこの頃でした。

ＳＰＦ養豚の実証試験が開始されたのは、協会設立の３年前からです。東京都小平市にあった家畜衛生試験場（現：動物衛生研究所）の施設を利用してプライマリー豚を生産し、全国各地の県や民間の隔離施設へ運んで育成・増殖し、ＳＰＦ養豚の優位性を現場レベルで実証するというプロジェクトでした。当時にしてみれば、このような大規模プロジェクトが官民の協力により実施されるのは画期的なことであり、しかも1966～1978年の10有余年の長期に及ぶものでした。さらに、後半からは生産者も参画し、経営面からの検討も行われ、ＳＰＦ養豚の優位性はいよいよ確実なものとなりました。その成果は養豚界から大きな関心が寄せられ、これを契機に養豚衛生の重要性が広く認識されるようになったのは間違いありません。

手元の資料で調べたところ、このプロジェクトのために小平の施設で生産したプライマリー豚は81腹815頭に及びましたが、当初は胎子の摘出手術や人工哺乳は試行錯誤の連続であり、子豚輸送の失敗も数多く経験しました。プライマリー豚の受入れ施設では、プライマリー豚の育成・増殖やＳＰＦ検定などの試験が実施されました。想定外の疾病汚染事故に見舞わるなど大変な苦労を強いられたようですが、ＳＰＦ養豚の優位性を示すデータは着々と蓄積されていきました。やがて、民間や県の中には独自にプライマリー豚の生産施設を整備し、生産ピラミッドを構築して生産者の要望に応える動きが活発となりました。

こうした一連の技術開発の流れの中、ＳＰＦ養豚の円滑な普及を図るために協会が誕生しました。しかし、ＳＰＦ養豚はすぐさま生産現場に受け入れられたのではなく、その普及には思いのほか手間ひまがかかりました。協会は規格・基準を設置し、地道な活動を続けてきたわけですが、その努力が実り90年代に入ってからＳＰＦ養豚を標榜する生産者はにわかに多くなってきました。協会はＳＰＦ豚農場の増加を踏まえ、それまでの認定基準の全面的な見直しを行い、1994年に新たな認定制度をスタートさせるに至りました。

現在、全国の養豚戸数は6,000戸台にまでに減ってしまいましたが、そんな状況の中でもＳＰＦ豚認定農場は着実に増え続けており、生産シェア10%は目前に迫っております。

ＳＰＦ養豚がここまで発展した背景には、その実利面における優位性だけでなく、国産ＳＰＦポークに対する消費者の信頼が一段と高まったことがあります。さらに付け加えるならば、協会会員の心のどこかに「ＳＰＦピッグ・プライド（ＳＰＦ豚を飼う誇り）」なるものが宿っていて、その誇りが発展への元気薬になっているように思えるのです。

日本ＳＰＦ豚協会設立40周年記念セミナーを開催します

11月12日（木）横浜・情文ホールにて

かねてご案内のとおり、協会は今年設立40周年を迎えました。

1969年10月、任意団体として設立されてから40年、５年前には法人化を果たし、現在は一般社団法人となりました。会員各位の努力と関係各位のご協力により、畜産界においてその存在を認められるようになったと確信しております。

現在、記念事業として出版物の制作などを進めておりますが、毎年恒例の協会セミナーも記念事業と位置付けて拡大、11月12日（木）、神奈川県横浜市の横浜情報文化センター「情文ホール」を会場に開催することといたしましたのでご案内します。

40周年記念式典の部　午前10：15〜12：30

今回のセミナーは午前と午後の２部構成です。

午前の部は40周年記念の式典をメインにした内容となります。

ここでは長年にわたり協会に多大なる貢献をされ現在に至る会員の中から数名を選出、感謝と敬意を込めて「協会特別表彰」をさせていただくこととなりました。

受賞者は下記のとおりです。

「ＳＰＦ豚功労賞」

（早くからＳＰＦ養豚に取り組み生産システムの構築、ＳＰＦ豚肉の知名度向上等に貢献）

小田島健夫さん（岩手県・㈲ケイアイファウム）

平　芳紘さん（長崎県・㈲芳寿牧場）

日浅　文男さん（北海道・㈲道南アグロ）

「協会特別功労賞」

（ＳＰＦ豚養豚の先駆けとして、社会的困難を克服し、協会の発展に尽力）

林　　栄さん（千葉県・㈱林商店）

続いて「協会40年のあゆみとこれから」と題したパネルディスカッションを行ないます。パネリストは協会会長のほかＳＰＦ豚功労賞受賞のお三方にお願いしております。さまざまな苦労話、これからのＳＰＦ養豚のあり方についてお話しいただきます。

セミナーの部　午後1：30〜16：45

昼食をはさんで午後からはセミナーの部となります。

まずは恒例となっている認定農場の生産成績の年次報告を分析および解説中心に行ないます。

次に南波利昭(社)日本養豚協会副会長による講演です。「養豚生産者自らの団体」のあり方についてご講演いただきます。

続いて生産成績最優秀農場の表彰式を行ないます。

３年目となった今年の表彰農場は、先に開催されました選考委員会における選考の結果、総合生産成績部門・商品化頭数部門ともに北海道の**青木ピッグファーム**に決定しました。総合生産成績では昨年に引き続き２年連続、商品化頭数と合わせ初の２冠達成となります。

代表の青木賢一さんは母豚150頭規模の農場をほぼお一人で管理されていますが、今年はお忙しい合間をぬって表彰式に駆け付けて下さる予定です。高成績を維持する秘訣、普段の管理のポイントなど直接お聞きするまたとない機会です。

最後に、**先進的ＳＰＦ豚認定農場紹介**として、農事組合法人八幡平ファーム常務理事・大泉俊昭氏にご講演いただきます。八幡平ファームは1,600頭規模で認定３年目の新しい大型農場で、リキッド フィーディングなど最新の技術を用いながら、抜群の生産成績を誇ります。その飼養管理技術、生産システムには大きな関心が寄せられており、貴重なお話を伺うことができると思います。

会場となる横浜市の横浜情報文化センターは神奈川県庁のすぐ近く、横浜の中心地にあり、ＪＲ・私鉄や空港からのアクセスも大変よいところです。

また、記念セミナーの**参加費用は無料**となっております。

会員の皆さま、関係者の皆さま、お忙しいとは存じますが、せっかくの機会ですのでぜひお誘い合わせの上、ご出席下さるようお願いいたします。

なお、セミナー終了後、会場近くの横浜情緒あふれるレストランにて懇親会も予定しております。合わせてご参加下さい。

多くの皆さんのご出席をお待ちしております。

日本ＳＰＦ豚協会設立40周年記念セミナー 開催要項

日　時　平成21年11月12日（木）10：15～

場　所：横浜情報文化センター6階
「情文ホール」

プログラム

●40周年記念式典の部　10：15～12：30

会長あいさつ
来賓祝辞
協会特別表彰
記念パネルディスカッション
「協会40年のあゆみとこれから」
パネリスト（順不同）
・赤池洋二協会会長
・小田島健夫氏（㈲ケイアイファウム）
・平　芳紘氏（㈲芳寿牧場）
・日浅文男氏（㈲道南アグロ）
司会：吉田修作協会顧問

昼　　食　12：30～13：30

●セミナーの部　13：30～16：45

ＳＰＦ豚農場の生産成績（分析および解説）
講演「養豚生産者自らの団体を」
講師：南波利昭氏
(社)日本養豚協会副会長
(財)畜産環境整備機構副理事長）

生産成績最優秀農場表彰式
・選考経過説明
・表彰
・受賞者スピーチ

休　　憩

先進的ＳＰＦ豚農場紹介
・大泉俊昭氏
（農事組合法人八幡平ファーム常務理事）

参加費：無料

懇親会　17：30～19：30

イタリアンレストラン「カリーナ」
（横浜市中区本町1-3　綜通横浜ビル地下1Ｆ）
参加費：5,000円

お申し込み
協会または各ピラミッドまでお問い合わせ下さい。申込書をお送りします（会員の皆さまにはすでにお送りしてあります）。

●申し込み期日　10月30日（金）必着

お問い合わせ
日本ＳＰＦ豚協会
TEL　03-5835-5375
FAX　03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

会場のご案内
横浜情報文化センター6階「情文ホール」
横浜市中区日本大通11　TEL.045-664-3737
http://www.idec.or.jp/shisethu/s6-jouhou.php4?f=jouhou

交通のご案内
●電車ーＪＲ東京駅→横浜（東海道線、24分）、みなとみらい線に乗換え「日本大通り駅」下車（約７分）
情文センター専用出口直結
東急東横線渋谷駅からみなとみらい線（元町・中華街行き）乗車「日本大通り駅」下車
●空港ー羽田空港よりリムジンバスで横浜（約30分、ほぼ10分間隔で運行）、みなとみらい線に乗換え「日本大通り駅」またはタクシー（約10分）

連載
豚の細菌病⑧

グレッサー病と *Mycoplasma hyorhinis*による多発性漿膜炎

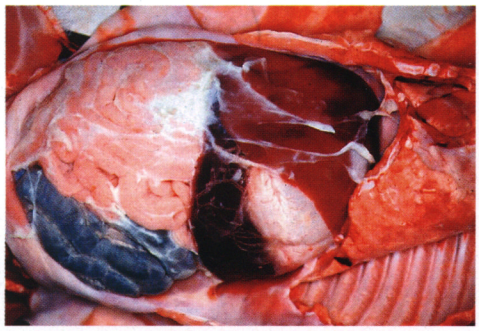
東京農業大学教授　山本　孝史

グレッサー病と*M. hyorhinis*による多発性漿膜炎は、主として５～10週齢の子豚が罹患し、多発性漿膜炎を主徴とする疾病で、臨床症状や病変はほとんど同じですのでまとめて記載します。両者とも通常は散発的にしか発生しませんが、グレッサー病はPRRS汚染豚群やSPF豚群では多発することがあります。

病因：グレッサー病の原因は*Haemophilus parasuis*です。本菌はグラム陰性の多形性、時に線維状を示す桿菌です。増殖にはNAD：ニコチンアミドアデニンジヌクレオチドが必要ですので、分離にはNAD（新鮮酵母エキスでも可）と血清を添加した培地やチョコレート寒天培地を用います。一方*M. hyorhinis*の分離にはムチンを添加したマイコプラズマ培地を用います。これらは実験感染によりそれぞれ単独で子豚に多発性漿膜炎を起こしますが、野外では両者が合併していることが多いようです。したがって、多発性漿膜炎罹患豚の病性鑑定を実施する際には、上記２種類の培地を用いるようにします。

疫学：*H. parasuis*、*M. hyorhinis*ともに子豚の鼻腔内に常在していますが、輸送や気候の急変などにより免疫が低下した際、鼻腔から気道、血流を介して異所寄生することにより発症します。SPF豚群の中には鼻腔に*H. parasuis*が常在していないものもあり、このような豚群が本菌に感染すると（保菌豚との接触によることが多い）、通常は散発的にしか発生しないグレッサー病が多発することがあります。特に種豚や肥育後期の豚など月齢の進んだ豚で発症率が高いという報告があります。

症状：症状を出さないまま急死する場合もありますが、通常41℃前後の発熱、元気消失、食欲不振を示します。次いで関節が腫脹し、跛行する個体が見られるようになります。また腹膜炎や胸膜炎が見られる場合は、歩行時に腹部を伸ばすような動作をしたり、呼吸が荒くなったりします。グレッサー病の場合、髄膜炎を起こすことがあり、その場合には起立不能や遊泳運動などの神経症状が見られます。関節の腫脹や跛行の症状は長期間持続する場合が多く、発育は遅延します。


腹腔内の漿膜面に線維素の析出が認められる

病変：心膜、胸膜、腹膜等の漿膜面に漿液線維素性～線維素膿性の滲出物が付着するのが特徴的な病変であり、その様子はちょうど卵とじのように見えます（写真参照）。病変は１カ所だけのこともあり、また複数箇所にわたることもあります。関節炎の発症した個体では、関節滑膜の肥厚と充血等が認められ、関節腔液は増量しています。

治療と予防：*H. parasuis*のみを原因とするグレッサー病であることがわかっていればペニシリン系薬剤でもよいのですが、臨床症状から両者を区別することは難しいので*M. hyorhinis*にも有効なテトラサイクリン系薬剤を用います。その際、発症豚だけでなく、同居豚すべてに投与するようにします。いずれの疾病も発症豚に対してはあまり効果は期待できませんが、未発症豚への予防効果はありますので、発症豚が見られたら速やかに投与すべきです。グレッサー病に対しては死菌ワクチンがあり、血清型が合致すれば有効です。

いずれの疾病も輸送や気候の急変が発症の引き金になることから明らかなように、できる限りこれらによるストレスを軽減することが、発症を予防する上で重要です。また、異常豚を早期に発見して早期治療に努めるようにします。

最近、グレッサー病に対する感受性は、雄親に左右されるのではないかとの実験成績が報告され[1]、感受性に関与する遺伝子解析がなされています[2]ので、いずれグレッサー病耐性系統豚が開発されるかもしれません。

＜参考文献＞

[1] Blanco, I. et al. (2008). Can. J. Vet. Res., 72, 228-235.

[2] Wilkinson, JM et al. (2008). Proc. 20th IPVS Congress, p03.046

ト◆ピ◆ッ◆ク◆ス

国際養鶏養豚総合展（ＩＰＰＳ2009）に協会ピラミッド(全農畜産サービス、シムコ）が出展

去る７月８、９、10日の３日間、愛知県名古屋市の名古屋国際展示場（ポートメッセなごや）において、国際養鶏養豚総合展（ＩＰＰＳ2009）が開催されました。

すでに雑誌等に掲載されご存知の方も多いと思いますが、この総合展は、国際養鶏養豚総合展運営協議会((社)中央畜産会、(社)日本養鶏協会、(社)日本養豚協会、(社)中央畜産会施設・機械部会会員により構成）が主催、農林水産省、愛知県、名古屋市の後援を受け、さらに多くの畜産関連団体の協賛のもと、実に８年ぶりに開催されました。

久々の開催とあってか、予想をはるかに上回る出展があったとのことです。

また、開催中天候に恵まれない日もある中、過去最高の入場者を数えるなど、大盛況となりました。地域柄か、従来は養鶏関係者が中心とのことですが、今回は養豚関係者の来場も多く見られたようです。

協会関係では、全農畜産サービスピラミッドとシムコピラミッドが出展。ＳＰＦ種豚や認定農場のパネル、関連資材の展示などにより、会場を訪れた養豚関係者の高い関心を集めました。

全農畜産サービスピラミッドのブース

シムコピラミッドのブース

ト◆ピ◆ッ◆ク◆ス

ちくさんフードフェアに協会が初の出展 ＳＰＦポークの試食などでＰＲ

協会では、10月10日（土）、11日（日）の２日間、神奈川県川崎市の(財）日本食肉流通センター内で開催された「ちくさんフードフェア」（川崎みなと祭りと同時開催）に出展いたしました。

このフェアは同センターが現在の川崎市東扇島に建設されたのを機に、地元の消費者に対し、食肉への理解や販売促進のための機会として行なわれるようになったもので、今年で28回目となります。野外バーベキュー、牛肉・豚肉の販売、全国味めぐりコーナー、家畜ふれあい牧場などの催しがあり、例年10万人近くの来場者を数えるそうです。

協会はＳＰＦポークの普及・促進を図るため、畜産関係団体コーナーに今回初めて出展、パネル展示やしゃぶしゃぶの試食、アンケート調査などを実施しました。

詳細は次号にてご紹介します。

紹介●ＳＰＦのお店⑩　とんかつと和食の店 長八

横浜市中区長者町八丁目125
TEL.045-251-8888

神奈川県横浜市の長者町はＪＲ桜木町、京浜急行日ノ出町、市営地下鉄伊勢佐木長者町などの駅からアクセスできる便利な場所。古くからある商店街の一角にあるのが「とんかつと和食の店長八」です。店名は「長者町八丁目」からきています。

店の創業は40年以上前。35年ほど前、社長の吉田哲さんのお父さんが、当時水産物卸売会社の社長として出入りしていた際、オーナーに気に入られてお店を譲られ経営することに。その後、別の経営者を経て、吉田さんが店を引き受けたのが15年前。それまでは好きなバイク販売のお店で働いていましたが「子どもの頃よく連れて来てもらった店なので愛着がありましたから」と吉田社長。

お父さんの頃からずっと続いているのが24時間、年中無休の営業。現在は14人スタッフの交代制で、二階の座敷と合わせ91席の店を切り盛りしています。長時間労働でさぞや大変なのではと思いきや「開・閉店作業がないし、電気代などのコスト面でも意外に効率的なところもありますよ。夜中でも開いているのが当たり前になっているので、特に宣伝をしなくても常連のお客さんが来てくれます」。不況がいわれる中、売上げは横ばいキープだそうです。

ＳＰＦポークとの出会いは２年半ほど前。いい豚肉がないかと探していたところへ、宮崎県の認定農場・レクスト産の豚肉を専門に扱っているジャパンミートを通して仕入れるようになりました。こだわったのは「同じ農場のものであること」。厨房を預かる店長の吉田友和さんとともにジャパンミートまで研修に赴いたり、協会のセミナーにも忙しい合間をぬって参加下さる熱心さです。

吉田哲社長（右）と吉田友和店長。血縁関係ではないそうです。

高校生の頃からとんかつ屋で修行後、吉田社長と同時期に長八に入り、その後ホテルの洋食部門での修行などを経て再び戻ってきた吉田店長は「やわらかさ、おいしさが全然違います」と太鼓判。

認定農場産豚肉を100％使った厚木ハムのソーセージも店のメニューに加えました。「ＳＰＦの内臓もぜひ使ってみたいですね。レクストさんにもお会いしたい。とことんＳＰＦです」と社長。店内に掲げている展章にも、そのこだわりがうかがえました。

●協会からのお知らせ●

●関東・北信越地区の地域研修会を開催

昨年度からの継続事業である地域研修会の関東・北信越地区研修会が８月27日（木）、東京都千代田区の「ちよだパークサイドぷらざ」会議室にて開催されました。

参加者は22名でした。

認定農場実務担当者を対象とした地域研修会は年度内に中四国地区および九州地区でも開催を予定しております。

詳細が決まり次第、該当地区の会員の皆さんにお知らせいたします。ぜひご参加下さい。

●役員の交代

峯苫稔三副会長（全農畜産サービスピラミッド）の退任に伴い、北島克好氏が協会理事および副会長に就任いたしました。

かんたん、おししい　いのこ家林シェフおすすめ、ＳＰＦポークレシピ

まるごと ＳＰＦ豚リブグリル

レシピ提供：いのこ家総料理長・林　勝

今回は、スペアリブを切らずにそのまま調理する、豪快で豪華な一品です。野菜スープで煮込んでからソースにからめます。ホームパーティーなどにもぴったりです。

材料（4人前）

ＳＰＦ豚スペアリブ　ブロック１枚
（切り分けたものなら食べる本数分）
余った野菜　適宜
おろしたまねぎ　半個分
砂糖　180g
濃口しょうゆ　１カップ
酒　１カップ
白ごま　少々
サラダ油　適量
その他クレソンなどお好みで

つくり方

① スペアリブをまるごと鍋に入れ、冷蔵庫に眠っている野菜を何でも加えます（皮などでもかまいません）。
② たっぷりの水を張って火にかけ、お湯が沸いてから45分煮込みます。
③ 煮込んでいる間にしょうゆ・酒・砂糖・おろしたまねぎを合わせて和風ソースをつくっておきます。
④ 火を止めたらそのまま冷めるまで待ち、野菜スープになじませます。
⑤ フライパンにソースを入れ、スペアリブを加えて3分ほど軽く煮込みます。
⑥大きめの皿に盛りソースをかけて白ごまをふり、クレソンなどをそえればでき上がり。切り分けて召し上がって下さい。

【林シェフのひとこと】
すぐに食べない時は、スペアリブを野菜のスープに漬け込んだまま保存しておくと、さらにおいしく召し上がれます。

●認定情報●

●平成21年度認定農場

［9月認定］（有効期間：平成21年9月10日から22年9月末日まで）

北海道・ホクレン滝川スワインステーション養豚技術センター、ササキＳＰＦファーム、㈲山中畜産長沼農場、㈲浅野農場、㈲フロイデ農場、㈲道南アグロ栗山農場、**岩手県**・全農畜産サービス㈱東日本原種豚場、㈲ケイアイファウム北上農場、(農)八幡平ファーム、**秋田県**・全農畜産サービス㈱秋田ＳＰＦ豚センター、㈱フカサワ深澤スワインファーム舘合農場、㈲ファームランド、**宮城県**・㈱シムコ岩出山事業所、**福島県**・㈱シムコ浪江事業所、**茨城県**・常陽発酵農法牧場㈱、東京養豚農業協同組合岩井牧場、オヌマファーム、山本ファーム鹿嶋、㈲米川養豚場、㈲弓野畜産千代田農場、**栃木県**・サンエス大渡農場、㈲Ｋ＆Ｔコーポレーション、**群馬県**・㈲小黒養豚、㈲ほそや、㈲畑中畜産、**長野県**・長野県農協直販㈱ＳＰＦ種豚センター、㈲岩垂原エスピーエフ農場、㈲タローファーム、㈲クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフこがねや第一農場、**千葉県**・㈲東海ファーム倉橋本農場、同猿田農場、同第２肥育農場、同第１肥育農場、㈲菅井物産飯岡農場、㈲下山農場第１農場、同飯岡農場、**埼玉県**・㈲松村牧場、**鳥取県**・㈱西日本ジェイエイ畜産矢下繁殖農場、同上馬場肥育農場、同上馬場一貫農場、**愛媛県**・ＪＡ全農愛媛県本部広見種豚増殖センター、**香川県**・㈱七星食品多和ファーム、**大分県**・㈲九重ファーム、**熊本県**・㈲高森農場、**宮崎県**・㈱ファームテックえびの種豚場、(農)守山畜産、**鹿児島県**・㈱シムコ鶴田事業所、㈱ファームテック大口農場、㈲新留養豚、鹿児島いずみ畜産㈱江内農場、そお元気㈱ファーム野方農場、高山大規模実験農場生産農場、同肥育農場（以上54農場）

※次回認定委員会は平成21年12月10日（木）の予定

SPFのひと

農事組合法人八幡平ファーム
阿部日出夫さん
●秋田県鹿角市

人との出会い
人を育てることを大切に

協会認定農場・八幡平ファームの所在地は岩手県の大平洋岸にほど近い洋野町（旧大野村）ですが、経営母体の農事組合法人八幡平養豚組合は岩手・青森両県と接する秋田県鹿角市にあります。鹿角市といえば十和田八幡平国立公園の秋田県側玄関口、日本三大ばやしの一つで県の無形民俗文化財にも指定されている花輪ばやし（毎年８月開催）が有名です。

八幡平ファームは母豚規模1,600頭、この９月で３回目の認定を受けた新しい大規模農場ですが、組合長である阿部日出夫さん（66歳）の養豚歴は40年に及びます。稲作農家の跡取りとして農業学校を卒業した後、「米プラス何かを」と、養豚に取り組むことを決意されたそうです。志を同じくする地元の仲間とともに養豚組合を組織、岩手県のケイアイファウム（協会認定農場）での研修等を経て昭和44年春、家の田んぼを整地し豚舎を建設、母豚50頭一貫経営でスタートしました。

その後規模拡大を重ね、昭和52年から平成２年にかけて鹿角市内の山間地にさらに４農場を建設、合わせて1,500頭という大規模養豚経営に発展しました。

早くからずっとＳＰＦ養豚に関心があり、既設農場でもＳＰＦ管理をしていた阿部さんですが、認定農場八幡平ファームの誕生には農場担当常務理事の大泉俊昭さんとの出会いが重要な役割を果たしたそうです。もと全農職員で獣医の大泉さんは衛生指導に農場に通ううちに自分で豚を飼ってみたくなり、休日を使って農場で研修。ついに全農を辞めて八幡平養豚組合に。「非常に熱心で最初から気が合いましたね」と阿部さん。

規模拡大のための用地探しをする中で隣県の岩手県と縁ができ、大型農場を立ち上げました。農場従業員も町の紹介で採用し、地元の雇用促進にも貢献しています。「なまじ養豚経験があるのはよくない。20代の未経験者を採用する。これからの戦力、これが一番の財産です」と阿部さん。抜群の生産成績を誇る同農場ですが（**セミナーで農場紹介予定。P2参照**）「人との出会い、人を育てることを大切にする」という信条がここまでの成功の秘訣といえそうです。今後の目標は「リキッドフィーディングで日本一の成績の農場ですね」。

息子さんを始めとする後継者も育ち、お孫さん７人の優しいおじいちゃんでもある阿部さんの趣味はゴルフ。腕前はシングルで取引先等や従業員コンペでも常にベスグロ争いです。「若い頃やった相撲とスキーのおかげか腰を痛めたことがない。しっかりした従業員がいるからゴルフにも出かけられる。その中からさらに出会い、縁が広がります」。素敵な笑顔で人を引き付けるカリスマ性と誠実な人柄が、若さと活気あふれる農場の要になっている、と実感させられました。（編集部）

編集後記

協会が設立されて40年が経過しました。ゼロから始めた日本のＳＰＦ養豚が生産シェア10%近くに達するまでの、赤池会長はじめ諸先輩方のご苦労は察して余りあるものです。ＳＰＦの認定制度を設置しようという考え方は、今ではごく当たり前になっている農場ＨＡＣＣＰなど農場を含む食品生産過程の衛生管理基準とまったく同様の考え方だったことをあとになって思い知らされ、協会の先進性を誇らしげに思ったものです。これから先もＳＰＦ養豚が優位性を保つために、さらなる生産性向上へ向け力を合わせた研鑽を期待します。（哲）

日本ＳＰＦ豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより
第37号　2009年10月1日発行（季刊）
発　行　一般社団法人 日本ＳＰＦ豚協会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375　FAX.03-5835-5376
e-mail：j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人　赤池　洋二
編集人　林　　哲